

「^{トポグラフィックな}地誌的」風景画の成立過程：16世紀後半のアントワープの画家たちの活動とその意義

廣川暁生（日本学術振興会特別研究員）

風景画というジャンルは17世紀の新興国オランダで成立したと言われている。近年その成立に際し、16世紀末に南ネーデルラントからオランダへと移住した画家たちの果たした役割が強調される傾向にある。16世紀に繁栄の頂点を極めたアントワープは、80年戦争で南ネーデルラントにおけるカルヴァン派の最後の拠点となった。1585年、アントワープが陥落すると、住民はカトリックの遵守か退去かを迫られ、大商人や職人、画家を含む市民の40%がオランダに移住したのである。その一方で、アントワープに残り、あるいはハプスブルク家の宮廷画家として活動を続けた画家たちについては等閑視されてきたように思われる。16世紀後半、彼らはアントワープの都市景観をとりあげ、しばしば「雪景色」として描き出した。本発表では、「近代的」風景画の萌芽となる「地誌的」(topographic)な風景画という観点からこれらの作品を考察することで、16世紀末のアントワープの画家たちが、「ジャンル」としての風景画の成立にいかなる役割を担ったかを明らかにしたい。

アントワープの都市像は15世紀末以降、様々な作品の背景に登場し、次第に独立した主題を形成するに至る。しかし描かれた都市像は、「地誌的」な記録というよりも都市を讃美する象徴的な意味合いが誇示される傾向にあった。そのなかで、ピーテル・ブリューゲル(父)の下絵(1558年)による銅版画《アントワープのシント・ヨーリス門前の氷滑り》は冬の情景とアントワープの都市像を結び付けた最も初期の図像と考えられる。従来この版画は後の版に付随する銘文から、氷滑りを「人生の危うさ」の象徴とする教訓的解釈が強調されてきたが、ここではむしろこの図像を都市の象徴的な表象から「地誌的」な指標へと移行する過程に位置づけたい。この作品ではさらに、氷滑りの光景がその「土地固有」(vernacular)の特性を付加しているのである。

ピーテル・ブリューゲル(父)が、聖書の主題の舞台や季節の描写として1565年以降に描いた「雪景色」においても、厳しい冬の情景はその「土地固有」の特性と結び付けられている。ブリューゲルの「雪景色」は当時非常に人気があり、とりわけ1565年に描かれた《鳥毘のある風景》のコピーは量産された。前景に氷滑りの情景が描かれ、遠景にアントワープの都市のシルエットが浮かび上がるこの作品の構図は、16世紀後半にアントワープの画家たちが描いた一連の「雪景色」の着想源となったと考えられる。しかしブリューゲル作品では舞台は農村で、遠景にアントワープの都市景観がいわば「合成」されているのに対して、後の作例では舞台はスヘルデ川に設定され、氷滑りの情景がアントワープの都市景観の一部として組み込まれている。これらの作例は必ずしも景観の忠実な再現とはいえないが、「地誌的」な概念やその「土地固有」の時間的、空間的特性という「近代的」風景画の成立に不可欠な構成要素を含んでいる。アントワープという都市に対する同時代人の関心の高まりとブリューゲルの「雪景色」の流行を背景としたこれらの作品は、「ジャンル」としての風景画の成立過程において、ひとつの大きな転換点として位置づけられるであろう。